

地域と連携した機能分担で、命題である三次救急の治療に邁進

救急部 副部長 相引眞幸 医師



PROFILE

あいびきまゆき◎愛媛大学医学部・救急医学助教授、附属病院救急部副部長。1954年、愛媛県生まれ。1978年金沢医科大学医学部卒業、医学博士。救急医療、集中治療を専門に活躍する。学生時代はゴルフ部に所属するも、現在は多忙なため全くプレーできていない。

24時間365日、「三次救急」の治療が愛媛大学病院救急部の大きな役割。三次救急とは、重度の外傷や熱傷、急性中毒、窒息、溺水などの事故による疾患、急性呼吸不全、急性循環不全、意識障害、敗血症、急性肝不全、急性腎不全、種々の出血など、一つの診療科では対応できない重症の救急疾患を言います。すぐ治療を始めないと生命が危険になったり、重

大な障害が残ったりする、比較的むつかしい病気や事故ですね。その大部分は救急車で運ばれるか、他の医療機関からのご紹介で来院されます。三次救急を担当する救急医は、外科、内科、整形外科など多様な診療科の知識を駆使して患者様を治療するのが役割です。そのためにもチームワークが大切。様々な分野の優秀な人材が集まり、チームで治療にあたります。私自身は麻酔科の出身で集中治療を行っていました。他の医師も一般外科や整形外科などのスペシャリストですし、スタッフ全員が救急の指導医の資格を持っています。当病院は四国で唯一、救急専門医及び指導医の認定施設でもあるんですよ。

高度な救急医療活動のための設備も整えています。一酸化炭素中毒患者などの治療に有効な高圧酸素治療室があり、様々な病態に適応されています。また、愛媛県は島嶼部や山間部の地域が多いので、各市町村の近隣に三次救急の受付施設が必ずあるとは限りません。そこでドクターヘリの搬送も行われています。ドクターヘリなら県の消防防災ヘリに救急部の医

師が同乗して現場まで向かいますので、現場での応急処置ができ、搬送も車よりかなり時間短縮できるので、救命に繋げることができています。

私の専門分野では、頭部外傷の治療に低体温療法を用いて成果を上げていますね。これまでに前任地を含め200例以上の患者様に同療法を施行し、脳外科の先生が諦めた患者様が、意識を取り戻した例もあり、私は有効だと考えています。

三次救急の他にも、診療所や他の病院からの紹介があった場合は、必ず診療を行っています。当救急部は200%を超える稼働率、外傷だけではなく様々な疾患を診ていますし、症例数も多いですね。そこでご理解いただきたいのは、三次救急受け入れのため、軽度の患者様に手が回らない状況。中予地域の市町はすべて、二次救急受け入れの当番医院になる二次輪番制度に加わっていますので、このような制度を利用いただければ幸いです。機能分担をすることで、周囲との連携を大切にしたい地域医療に貢献していきたいと思っています。

